

すずらん抄

『風俗三石土』

板本の錯丁に就いて

小林 勇

少しく以前の事になるが、或る研究会で筆者が礎講を担当して銅脈先生の名作『風俗三石土』を読んだ。その際気の付いた事実を、事柄は誠に瑣細な事乍ら一度そうした場に於て報告したこともあり、更めて紙面を借りて書き付けておく事にする。

今日通行の『風俗三石土』の板本は中本二冊に仕立てられているがその下巻の方に、恐らくは板下の段階で一個所の錯丁が生じており、その儘通しの丁数が振られている。少し注意をして読めば文意の続き難い事には心付かれる筈なのだが、どういうものか今日迄見過ごされている如くで『洒落本大成』第二十九巻の翻印に於ても正されておらず、又同『大成』及び同書を影印した『大東急 記念文庫善本叢刊』洒落本集の解題に於ても何らの言及もなされていない。その丁は即ち「下十九」「下廿」の両丁で『善本叢刊』の影印では四九五頁から四九八頁に亘り、『洒落本大成』では二八八頁に翻印されている。三士が漸く腰を落ち着けることを得た野河町の茶屋で花車から壇王裏であった怪

談めいた一件の話を聞いている所で、「下十八」丁裏は花車の科白「き聞いナ」で終り「下十九」丁表「何ぞひかふ」へと続くので一見これでも文意は連続する如くであるが、芸妓を差置いて花車が三味線を「ひかふ」と言うのも変である。又「下十九」丁裏は下から来た「小めろ」の「とよ富代さん」という呼び掛けで終り、「下廿」丁表の「を鬼は。わたしも見ましたが。」の科白へと続いていて此所も一見連続するが、以下の口調は「小めろ」らしくない。更に「下廿」丁裏は芸妓富代の「お仲さんもふいひな。おかしうしゆんできた」の科白で終り「下廿一」丁表は「御むかひが」で始まるので、唐突でもあり此所は変だと気付かれよう。

以上の点は「下十九」「下廿」の両丁を入れ換える事で解決する。即ち「下十八」丁裏の花車の科白は「下廿」丁表に連続し、「鬼」の一件が最後迄語られてから「下十九」丁へ戻って「おかしうしゆんできた」「何ぞひかふ」と気を変えての諷きとなり、そこから「下廿一」丁へ移って下からやってきた「小めろ」の「とよ富代さん」「御むかひが」と続くのである。『善本叢刊』の頁付けで言えば四九四、四九七、四九八、四九五、四九六、四九九の順に読むことになる。恰度一丁分の入れ替わりなので板下の段階で何かの事情でこの部分の前後が逆になったものと考えられよう。そしてそのそれぞれの丁移りの前後が偶々右に見たように一見文意が連続するが如き形になっていた為にその儘丁数が付せられて板刻され、又その形態の儘で今日迄読まれてきたものと思われる。

この事は作品そのものの検討だけからでも十分言い得る事であるが、猶それに加うるに他の資料もあるのでそれに就いて若干述べておく。一体この作品は作者銅脈先生の歿後四十三年を隔てて刊行されたものであり、更に実際の成立時期と推測される安永末年からでは七十年近い歳月を経ている為、刊行の経緯に就いても序文を附した安穴道人の斡旋に依るものであらうと考えられる以外は不明と言うの外ない。底本も全く分からないが果たして「太平館銅脈先生遺稿」そのものであつたかどうか、転写本であつた可能性の方が高いのではなからうか。若し然らば刊本の本文と雖も十分に信用出来るものではなく他の写本の本文も尊重されねばなるまい。今筆者が資料として挙げ、又研究会の場でも対校テキストとして用いたのは京都大学附属図書館蔵、半紙本一冊全二十丁の写本である。初めの一丁は扉の体になつてゐるが或いはこれが本来の共表紙であつたかも知れない。現状ではその上に別に布目装の表紙が掛けてある。癖のある書体で読みづらい上に時として脱落箇所もあり後で欄外に補記する等善写本とは称し難く、書写年代も不明であるが刊本の写本ではない。と言うのはこれを刊本と比較するに大きな異同はないものの語句の細かな違いは枚挙に遑のない程多く存在するからである。扱この写本で問題の箇所を検するに慥に右に正した通りの順序になつており、板本の板下段階での錯丁を裏付けている。写本と板本との細かな校異の如きは本欄の性質上これを示す訳にもゆかず、又この写本に就いては本来ならば筆者が紹介の任に当るべきでもない事情もあるので此所には掲げな

いが、一個所だけ挙げておくと板本では上冊の終りは「中居おりだんがあぶなうござります兵いまひくさんな中居おしづかに」となつていて、下冊は「かくて三士ハ。もとの川原へ出て。修理粹これハどふするぞい」と始まつているが、写本では「中居おりだんかあぶなうござります兵馬かまいくさんな」とある次に割書きの形で「ミなく河原へ出る」とあり、修理の科白に続いている。そうするとこの部分などには或いは上下二冊本に仕立て上げる為に若干ではあるが出版に際して原文に手が加えられた可能性も考えられる等問題を提起するものと言えよう。先に述べた如く善写本とは称し難い本であるから逆に本書の本文が刊本に立ち優るものかどうかは更なる検討を要するけれども、本書は『国書総目録』に記載されるだけで（猶『国書』には写本としては他に三村竹清の蔵書が記載される）公に紹介されたものを見ないので此所に付記した次第である。